

佳作賞

『母娘餅』

「澤標」刊

後藤康子氏

後藤康子（ごとう・やすこ）

一九四九年一月三日、大分県生まれ。

その後 結婚のため兵庫県神戸市へ。

現在、神戸市在住。

『玉蘭』同人。

『母娘餅』（単行本）

朝早くから夜遅くまで野良でドロドロになつて働く両親がいて、私たち子どもはその畑の片隅で土に埋まる白い根っこをおもちゃに遊んでいた。山とたんぼに囲まれた小さな村ではそれが普通であり、当たり前だと思つていた。小学校に上がると、子ども心に町に住む友との生活の違いが分かり、自分の貧しい暮らしを恥ずかしく思うようになっていた。

今となつてはその生活が愛おしく、その場に居られた自分を誇りに思うようにさえなつていく。

抜けるような青い空と緑濃い山、小川のせせらぎ、澄み切つた空気、そのときときの豊かな実りに囲まれた情景の中での家族の笑い声がこの上なく懐かしい。

この貧しくつましい生活の中で、精一杯の愛情を示してくれた家族、特に母親のそれを感じるようになったのは、ずいぶん後のことになる。母とふたりでおこなつた餅つき、視線を背中に感じながらの切り干し大根作り、手順を思い出しながらの紫蘇の実漬け、それらの手仕事はいつのまにか娘の私に伝わつていた。

不器用な父は口には出さず、どんなときもやさしい眼差しで見守り続けてくれた。たつた一人の弟とは、「姉弟な

のにおかしいよ」と言われるほど仲良しで、ふたりであちこち旅もした。父が逝き、頼りにしていた弟が急逝した。二人の死に、いまだに涙を流せない自分がある。

母は、最愛の息子を喪つて「死にてえ、死にてえ」を繰り返すようになっていた。半年ほどの施設入所の後、古家の独り暮らしに戻つた。九十歳を過ぎた母と一緒に暮らすのがいちばん良いと思いつつ、不自由な田舎生活に戻れないでいる。還暦過ぎから発症した腰痛もその一因になつた。

母にすまないという気持ちと、自分がいちばんと思う気持ちの葛藤から抜けきれない。

結婚後移り住んだ神戸の街は、生まれ育つた山村とはあまりにも違い、なかなかなじめなかつた。

長男の子育てでは、日々さまざまな症状の出でくる彼に母親として傍に居ることだけしかできなかった。彼の息絶えた姿を思い浮かべたことも一度や二度ではなかつた。そんな彼が初めて立ち上がった時の感動は忘れることができない。幼子の一生懸命な眼差しが、私を母親として人間として成長させてくれた。

定年退職後、ホームヘルパーの講習を受けたり、子育てサポートのボランティアもした。今の時代それらが、私たち高齢者の力を必要としていることを痛切に感じた。

神戸で手に入れた要約筆記ボランティアは、私の後半人生の大切なもののひとつになつた。難聴・中途失調という

言葉を知り、それをもつ彼らの苦しみや悲しみを知つた。どうすれば役に立つのだろうかと思ひ、日々学習し寄り添つてきた。彼らと関わり、一層自分を高めていきたいと思うようになっていた。

その活動をするうちに同じ目的を持つ者同士の絆が深まり、各地をいっしょに旅するようになってきた。旅先では、普通のおばさんに戻り、時間のたつのも忘れ、笑つたり喋つたりの楽しい時間を過ごした。

時間と気持ちの余裕が出てくると、生来の知りたがり・面白がりの性格が沸き上がり、神戸の街歩きを楽しむようになっていた。

神戸らしいモダンな景色を味わい、港町ならではの素晴らしい情景にも触れることができた。華やかで近寄りがたい神戸にも深い歴史があることを知り、改めてこの街を好きになつた。いつの間にか自分は、この街の人になつていくのだと感じるようになっていた。

ふたつの故郷大分と神戸が、昔と今が、私の頭の中を行つたり来たりしている。